

業績説明書(守谷順)

Moriya, J., & Tanno, Y. (2009) Dysfunction of attentional networks for non-emotional processing in negative affect. *Cognition & Emotion*, 23, 1090-1105. (IF: 1.901)

不安・うつ傾向の人は、怒り表情などの脅威的な刺激に注意を向けることが知られており、注意バイアスと呼ばれる。しかし、注意バイアスの原因が、不安・うつ傾向者の過剰な情動処理によるか、単に注意機能の低下によるか明確にはされていなかった。本研究ではそれまで検討されていなかった後者の“注意機能”に焦点を当て、情動刺激ではなくても注意機能の低下が見られるか検討した。その結果、不安・うつ傾向者は注意の中でも orienting（空間的注意）機能が低下している可能性が示唆された。つまり、不安・うつ傾向者は能動的に注意をある場所に向けることが難しいと考えられる。注意バイアスの原因が能動的な注意制御の難しさによる可能性を示唆する結果となった。

Moriya, J., & Tanno, Y. (2009) Competition between endogenous and exogenous attention to nonemotional stimuli in social anxiety. *Emotion*, 9, 739-743. (IF: 3.726)

不安傾向者は能動的な注意制御が困難である可能性が示されたが、空間的注意のもう 1 つの要素である自動的な注意の働きについては明らかではなかった。本研究では対人場面を恐れる社交不安傾向者を対象とし、能動的な内発的注意と自動的な外発的注意を同時に測定することで、社交不安における自動的注意の役割について調べた。結果、社交不安傾向者は自動的な外発的注意が促進されており、明るい刺激など顕著性の強い目立つ刺激に対しすばやく注意を向けることが明らかとなった。これまでの先行研究から、脅威刺激も顕著性が高いことが知られており、注意バイアスの原因として社交不安傾向者の過剰な外発的注意が影響を及ぼしている可能性が初めて示唆された。

Moriya, J., & Tanno, Y. (2011) The time course of attentional disengagement from angry faces in social anxiety. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 42, 122-128. (IF: 1.855)

社交不安傾向者は脅威的な刺激に注意を向ける一方で、脅威刺激に注意を向けると注意を離す（解放する）ことが困難であるとも考えられていた。しかしながら、注意の解放について適切な方法で調べられた研究は少なく、また脅威刺激に注意を向けた後にどのタイミングで注意の解放が困難になるか示されていなかった。本研究では Gap-Overlap 課題を用いることで、注意の解放とその他の注意機能（捕捉、移動）を切り分けて測定することを可能とした。さらに刺激提示時間を操作することで、怒り表情からの注意解放が困難になるタイミングを調べた。結果、社交不安傾向者は怒り表情提示後 300ms で注意の解放が困難になることが分かった。一方、注意の捕捉・移動と社交不安との関連は見られなかった。

Moriya, J., & Sugiura, Y. (2012) High visual working memory capacity in trait social anxiety. *PLoS One*, 7, e34244. (IF: 3.730)

社交不安傾向者は、情報を一時的に保持するワーキングメモリ能力が低いと言われてきた。一方で **Moriya & Tanno (2010)** より、社交不安傾向者は多くの刺激に一度に視覚的注意を向けている可能性が示唆された。したがって、ワーキングメモリ能力が低くとも、視覚刺激を保持する視覚的ワーキングメモリ容量は社交不安傾向者でも多い可能性が考えられる。本研究では、変化検出課題を用いて社交不安傾向者の視覚的ワーキングメモリ容量を測定した。結果、社交不安傾向が強いほどワーキングメモリ容量が多いことが示された。その一方で記憶する必要のない妨害刺激を提示すると、社交不安とワーキングメモリ容量との関連は消えた。これは、社交不安傾向者の注意制御能力が低いため、妨害刺激をうまく抑制できないためと考えられた。

Moriya, J., Koster, E. H. W., & De Raedt, R. (2014). The influence of working memory on visual search for emotional facial expressions. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 40, 1874-1890. (IF: 3.358)

人は複数の刺激の中から怒り表情へ瞬時に注意を向けることが知られており、怒り顔優位性効果と呼ばれる。この効果は社交不安を高める要因と考えられ、そのメカニズムの解明が重要である。また、注意はワーキングメモリの内容から影響を受け、保持した内容と合致する刺激に注意を向けやすいことが知られている（例えば、赤色を記憶すると赤いリングに注意が向きやすい）。これを利用し、ワーキングメモリの内容の操作が怒り優位性効果に与える影響について調べた。結果、怒り表情を記憶すると、かえって怒り優位性効果が弱まることが示された。怒り表情を記憶すると、記憶と合致しない刺激（例えば笑顔など）に注意が向いた際に記憶との間に競合が生じ処理が遅れ、結果として怒り表情への注意が遅れる可能性が考えられる。